

## 二重目的語における日本語と中国語の述語

著者名(日)	徐 夢?
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	21
ページ	111-126
発行年	2015-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001174/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001174/</a>

## 二重目的語における日本語と中国語の熟語\*

徐 夢姣

### 要旨

対格—与格—動詞と与格—対格—動詞の語順のどちらが基底の構造かについて、Hoji (1985) と Miyagawa and Tsujioka (2004) で異なる見解が見られる。本稿は、この点を日本語の熟語と対応する中国語の熟語の資料を提示しながら、後者の立場が支持されることを見る。また、中国語における与格—動詞からなる熟語と対格—動詞からなる熟語の比率もあわせて調査する。さらに、二重目的語構造を持つ中国語の表現を受動化、関係節化、修飾という三つの文法操作の点から考察し、そこに見られる凍結度の違いを提示する。

キーワード：二重目的語、凍結度、熟語、身体部位、日中比較

### 0. 序

本論は動詞が与格と対格の2つの名詞句を取る構文を熟語の点から考察し、その資料を提示することを目標にする。より具体的には、従来、与格と対格の語順のどちらが先に生じる基本語順かについて論点があった。Hoji (1985) は、与格—対格—動詞が日本語の基本語順であるとした。それに対して、Miyagawa and Tsujioka (2004) は与格—対格—動詞も対格—与格—動詞もともに基本語順であるとした。その証拠の1つとしては、対格—動詞からなる熟語も、与格—動詞からなる熟語も存在する事実をあげている。遠藤 (2014) は、両者を辞書で網羅的に調べあげ、Miyagawaの考えを支持しながら、対格—動詞からなる熟語のほうが圧倒的に多い点や身体部分を使った表現が多い点を指摘している。

本稿では、中国語の対格と与格を持つ動詞からなる熟語を調べてあげる。ここでは、まず、中国語の基本的な統語構造を解説した後で、遠藤で指摘されている日本語の事例に対応する熟語と対応しない熟語を提示する。次に、遠藤では述べられていない日本語と中国語の熟語の資料を示す。さらに、日本語と中

国語で対応する熟語がある場合でも、そこで使われる身体部位が異なることを示す資料を提示する。最後に、本稿では、熟語である基準として、Miyagawa and Tsujioka（2004）に従い、与格と対格が入れ替えられないという点を採用するが、熟語の中でも、凍結度に差がみられることを受動化、修飾、関係節化を適用しながら明らかにする。

## 1. 中国語の二重目的語の基本語順

資料を提示する前に、まず中国語の統語構造を語順の点から整理する。次の例に見るように、中国語は英語と同じくSVOの語順を持ち、主要部が前に生じる。

- (1) 小王            爬            山  
       王さん        のぼる        山  
       王さんは山を登る

ここでは、主要部「のぼる」という動詞が目的語の前に生じている。他の語順も存在はするが、(1)が中国語の基本語順である。

次に、本論の焦点となる。与格と対格の名詞句を持つ文をみよう。

[対格動詞の場合]

- (2) 小王            把            秘密            告诉-了        我  
       王さんは 処置介詞 秘密を        教えた        私に  
       王さんは秘密を私に教えた。

[与格動詞の場合]

- (3) 小王            给            我            讲-了    一个        故事  
       王さん 授与介詞 私に        話した    一つの    物語  
       王さんは私に物語を話した。

(2)は、対格と与格の名詞句を同時に持つ文の場合、対格である直接目的語が与格である間接目的語の前に生じると、「把」という語が生じることを示している。一方、(3)は、与格である間接目的語が対格である直接目的語の前に

生じ場合、「給」という語が生じることを示している。中国語では、対格と与格の語順が自由に入れ替えられる。この入れ替えができない場合、本稿では、それを熟語と認定する。

## 2. 資料

### 2.1 遠藤 (2014)

前節で述べた中国語の基本的な性質を念頭に置いて、まず、出発点として、遠藤 (2014) の提示した与格—動詞からなる熟語と対格—動詞からなる日本語の熟語を提示する。そして、その横に対応する中国語がある場合には、中国語の事例を提示する。本稿では、対応する中国語の事例をA-Eの以下の五つのクラスに分ける。

A-1 日本語に対応する熟語が中国語にもあるが、S-構造で与格や対格の名詞句が動詞と一語になっている場合、

#### (I) 与格—動詞

手に入れる：入手

#### (II) 対格—動詞

怒りを遷す：迁怒

ここであげた例は、S-構造においては一語のように見えるが、D-構造では、日本語と同じように、「手に入れる」という構造を持つ可能性がある。実際、影山 (1980) では、「来日」という一語がD-構造では「日本に来る」であり、「日本」が「来る」に編入 (incorporation) された結果、「来日」という語が形成されると述べている。本論では、これらの事例を、A-1という独立したカテゴリーで扱う。

A-2 日本語に対応する中国語の表現が、VN (つまり、動詞—名詞の連続体) の形を持つ語になることが多い。これらの語を離合詞と呼ぶ。例えば、「插嘴」、「動心」<sup>1</sup> などのような離合詞は一語のように見えるが、VとNの間に別の要素が入って文や句が成り立つので、一語ではない。本稿では、離合詞をA-2というカテゴリーで提示する。

A-3 Nが一文字ではないという点で、A-2の離合詞とは異なるが、VとNが熟語であり、かつ与格と対格の入れ替えができない事例がある。本稿では、このような事例をA-3というカテゴリーで提示する。

(Ⅲ) 膝を打つ：拍大腿

B. 日本語に対応する中国語の表現は与格と体格の入れ替えができるが、その結果、与格や対格が別の格になってしまう。通例の熟語でない場合においても、与格と対格を入れ替えると、格が変化するので、この場合、熟語として、認定しない。

(Ⅳ) 頭に入れる

记在脑里

頭の中に記入する

例： 把 刚才的话 记 在 脑子里  
処置介詞 さっきの話を 記入する に 頭の中  
さっきの話を頭に覚える

次の文は入れ替え操作をしたものである。

在 脑子里 记住 刚才的话  
で 頭の中に 覚える さっきの話を  
頭の中でさっきの話を覚える。

C. 日本語の熟語に対応する中国語の表現は二重目的語構造、または、対応する中国語の表現に比喩的な意味がない場合がある。本稿では、このような事例をCというカテゴリーで提示する。例えば、事例に見るように、日本語の「心に浮かべる」という熟語は「父の姿」という目的語を取っているにもかかわらず、中国語のほうは主語しか取れない。

(V) 心に浮かべる

父の姿を心に浮かべる

父亲的身影 浮现 在眼前

父の姿が 浮かぶ 目の前に

- D. 四字熟語を形成する場合も対格や与格が動詞と熟語を形成するとは考えにくいので、これには、Dという独立したカテゴリーを設けて、熟語としては認定しない。

(VI) 掌上にめぐらせる：運之掌上

- E. 凍結度が最も高い中国語の熟語（与格と対格の名詞句が入れ替え不可能な場合）

以上の点をもとに、分類したのが以下の資料である。

表2-1-1

対格—与格—動詞

日本語の熟語	中国語表現	中国語表現の日本語訳	タイプ分け
手に入れる	得到、到手	入手する	A1
耳に入れる	告诉	伝える	C
心に浮かべる	浮现在眼前	目の前に浮かべる	C
念頭に置く	放在心上	心に置く	B
手中に収める	掌握在手中	手中に掌握する	B
腹に収める	咽下肚子	腹に飲み込む	E
胸に思い描く	描绘在心中	心の中に描く	B
手塩に掛ける	亲手抚养	実の手で扶養する	C
気にかける	记挂在心上	気にかける	B
心に刻み込む	铭刻在心中	心に銘記する	B
目にする	看到	見える	C
耳にする	听到	聞こえる	C

口にする	说话	話す	C
気にする	介意	意に介する	A1
懐にする	据为己有； 揣入怀里	自分のものにする； 懐に入れる	D B
口に出す	脱口而出	口から言い出す	D
胸に畳む	藏在心中	心に隠す	B
心にとめる	记在心里	心に記入する	B
耳に挟む	听闻	ちらっと聞く	C
身にまとう	穿在身上	身に着る	A1
手のうちに丸め込む	捏在手里	手の中に握りこむ	B
大目に見る	从宽处理	寛大に扱う	C
肝に銘じる	铭记于心	心に銘記する	D
掌上にめぐらせる	运之掌上	掌上にめぐらせる	D
気に病む	苦恼	苦しみ悩む	C

与格一対格一動詞

日本語の熟語	中国語表現	中国語表現の日本語訳	タイプ分け
鼻息を仰ぐ	仰人鼻息	鼻息を仰ぐ	D
意を致す	致意	意を致す	A1
思いを致す	致思	思いを致す	A1
心を致す	尽心竭力	心や力を尽くす	D
足を入れる	进入	進んで入る	C
肩を入れる	帮助	助ける	C
気を入れる	专心	心を込める	A1
口を入れる	插嘴	口を挟む	A2
心を入れる	用心	心を用いる	A2
腰を入れる	投身	身を投げる	A1
力を入れる	致力	力を致す	A1
手を入れる	拾掇	片づける	C
泣きを入れる	哭着哀求	泣いて哀願する	C

念を入れる	仔细	注意深い	C
身を入れる	专心	心を込める	A1
嘴を容れる	插嘴	口を挟む	A2
膝を容れる	容膝之处	膝を容れる場所	D
心を動かす <sup>2</sup>	动心	心を動かす	A2
骨を埋める	倾尽必生	生涯を尽くす	A3
手付けを打つ	付首付	頭金を払う	A3
膝を打つ	拍大腿	太ももを打つ	A3
怒りを遷す	迁怒	怒りを遷す	A1
心に移す	移情别恋	別の恋情に移す	D
恩を売る	卖人情	人情を売る	A3
顔を売る	出名	名が出る	C
口を割る	坦白	白状する	C
尻を割る	暴露	暴露する	C

この表によると、日本語の与格一動詞からなる熟語の数は25であり、対格一動詞からなる熟語の数は27である。一方、中国語で与格一動詞からなる熟語の数は1例であり、対格一動詞からなる熟語の数は8例である。

ここでは、純粹に熟語の二重目的語構文といえそうなA2、A3とEをカウントしている。日本語では、対格一動詞からなる熟語のほうがやや多くて、中国語でも対格一動詞からなる熟語のほうが多いことがわかった。これは、遠藤(2014)で提示した対格一動詞からなる熟語のほうが多いということに一致している。

## 2. 2他の事例

次に遠藤では指摘されていない対格と動詞、また、与格と動詞からなる日本語の熟語を提示する。それが、中国語にも対応するかを並記する。



表2-2-1

## 対格—与格—動詞

日本語の熟語	中国語表現	中国語表現の日本語訳	タイプ分け
気に入る	中意	意（気）が当たる	C
首にする	解雇	雇用を解する	C

## 与格—対格—動詞

日本語の熟語	中国語表現	中国語表現の日本語訳	タイプ分け
足を掬う	使绊子	わなを仕掛ける	A3
頭を痛める	伤脑筋	脳の筋を傷つける	A3
頭を抱える	苦恼	苦しみ悩む	C
頭を下げる	低头	頭を下げる	A2
頭を絞る	绞尽脑汁	脳みそを絞りつくす	A3
頭を悩ます	动脑筋	脳の筋を動かす	A3
頭を捻る	费心思	心や思いを費やす	A3
命を懸ける	拼命	命を懸ける	A2
意を用いる	注意	意を注ぐ	A1
腕を振るう	施展才能	才能を施す	A3
思いを焦がす	苦心焦虑	心を苦しめ思いを焦がす	D
思いをはせる	怀念	念を胸で抱える	C
思いを寄せる	思慕	思い慕う	A1
顔を出す	出席	席に出る	C
肩を貸す	帮助	助ける	C
気を配る	留心	心を留める	A2
気を使う	操心	心を操る	A2
気を付ける	注意	意を注ぐ	A1
口をかける	打招呼	話をしておく	A3
首をひねる	不得其解	その解答がわからない	D
心を傾ける	倾尽全力	全力を傾けつくす	A3
心を砕く	操心	心を操る	A2
舌を巻く	呶舌	舌を嚙む	A1
尻に敷く	处处管着	何でもしつける	C

ここでは、遠藤（2014）に提示されていない26の事例が見られる。この場合、与格一動詞からなる熟語は2例であり、対応する中国語の表現は0である。一方、対格一動詞からなる熟語24例中、対応する中国語の表現は13例である。表2-1-1と表2-2-1を合わせると、日本語では、与格一動詞からなる熟語の数は27で、対格一動詞からなる熟語の数は51である。一方、対応する中国語の表現は、与格一動詞からなる熟語の数は1例で、対格一動詞からなる熟語の数は21例である。すると、全体の比率は、ほぼ日中両語で等しいことがわかった。つまり、日本語でも、中国語でも、与格一動詞からなる熟語の数よりも、対格一動詞からなる熟語の方が、圧倒的に数が多い。

### 3. 文法操作

本節では、前節で見た熟語のうち、対格と与格の要素は入れ替えができるものを文法操作の点からさらに分類する。より具体的には、以下に見るFraser（1970）の述べる熟語の凍結後をはかるための文法操作を熟語に適用すると、前節の熟語が、動詞との結びつきの強さによって、さらに分類できることを示す。

- (a) 受身 熟語の一部を受身の主語にする
- (b) 修飾 熟語の一部を修飾する
- (c) 関係節化 熟語の一部が関係節の先行詞にする

尚、本稿では、ページ上の関係で、遠藤（2014）に見る熟語だけを取り上げる。また、前節で述べたA-1のタイプに関しては、これらの文法操作が適用できないので、本稿では除外する。以下が、その結果である。

#### 1) 念頭に置く

家族の健康を念頭に置く

把 家人的 健康 放在 心上

処置介詞 家族の 健康 置く 心の上に

a) \* 心上 被 放着 家人的 健康

心の上に 受身介詞 置く 家族の 健康

- b) 把 家人的 健康 时刻 放在 心上  
 処置介詞 家族の 健康 いつも 置く 心の

家族の健康をいつも念頭に置く

- c) \*放着 家人的 健康 的 心  
 置く 家族の 健康 の 心

2) 手中に収める

幸せを手中に収める

- 把 幸福 握在 手中  
 処置介詞 幸せを 握る 手中

- a) \*手中 被 握着 幸福  
 手中に 受身介詞 握る 幸せ

- b) 把 幸福 紧紧地 握在 手里  
 処置介詞 幸せを しっかり 握る 手中  
 幸せをしっかりと手中に収める

- c) \*握着 幸福 的 手中  
 握る 幸せ の 手中

3) 腹に収める

その秘密を腹に収める

- 把 那个秘密 咽下 肚子  
 処置介詞 その秘密を 飲み込む 腹

- a) \*肚子 被 咽下 那个 秘密  
 腹に 受身介詞 飲み込む その 秘密を

- b) 把 那个 秘密 悄悄地 咽下 肚子  
 処置介詞 その 秘密を こっそり 飲み込む 腹  
 その秘密をこっそり腹に収める

- c) ??咽下 那个秘密 的 肚子  
 飲み込む その秘密 の 腹

4) 胸に思い描く

その町の未来図を胸に思い描く

把那个城市的未来图描绘在心中

- a) \*心中 被 描绘 那个城市 的 未来图

心の中に 受身介詞 描く あの町 の 未来図

- b) 把 那个城市的 未来图 悄然地 描绘在 心中  
 処置介詞 その町の 未来図を こっそりと 描く 心の中に  
 その町の未来図をこっそりと胸に思い描く

- c) ??描绘 那个城市的 未来图 的 心  
 描く その町の 未来図 の 心

5) 気にかける

余計なことを気にかける

把不必要的事放在心上

- a) \*心上 被 放了 不必要的 事  
 心の上に 受身介詞 置く 余計な ことを

- b) 把 不必要的 事 一直 放在 心上  
 処置介詞 余計な ことを ずっと 置く 心の上に  
 余計なことをずっと気にかける

- c) ??放着 不必要的 事 的 心  
 置く 余計な こと の 心

6) 心に刻み込む

おばあさんの教を心に刻み込む

将<sup>3</sup>祖母的教诲铭刻在心中

- a) \*心中 被 铭刻了 祖母 的 教诲  
 心の中に 受身介詞 刻み込む 祖母 の 教え

- b) 将 祖母的 教诲 牢牢地 铭刻在 心中  
 処置介詞 祖母の 教を しっかりと 刻み込む 心の中に  
 祖母の教をしっかりと心に刻み込む

- c) ??铭刻 祖母的 教诲 的 心  
 刻み込む 祖母の 教え の 心

7) 懐にする

大金を懐にする

把一大笔钱揣入怀里

- a) \*怀里 被 揣入 一大笔 钱  
 懐に 受身介詞 入れる 膨大な お金を

- b) 把 一大笔 钱 悄悄地 揣到 怀里  
 処置介詞 膨大な お金を こっそり 入れる 懐に  
 大金をこっそりと懐にした
- c) \* 揣入 一大笔 钱 的 怀  
 入れる 膨大な お金 の 懐
- 8) 胸に畳む  
 思い出を胸に畳む  
 把回忆藏在心里
- a) \* 心里 被 藏着 回忆  
 心の中に 受身介詞 隠す 思い出
- b) 把 回忆 永远地 藏在 心里  
 処置介詞 思い出を 永遠に 隠す 心の中に  
 思い出を永遠に胸に畳む
- c) ??藏着 回忆 的 心  
 隠す 思い出を の 心
- 9) 心にとめる  
 恩師の言葉を心にとめる  
 将恩师的话记在心里
- a) \* 心里 被 记着 恩师 的 话  
 心の中に 受身介詞 記入する 恩師 の 言葉
- b) 把 恩师 的 话 时刻 记在 心中  
 処置介詞 恩師 の 言葉を いつも 記入する 心の中に  
 恩師の言葉をいつも心にとめる
- c) ??记着 恩师 的 话 的 心  
 記入する 恩師 の 言葉 の 心
- 10) 手のうちに丸め込む  
 彼を手のうちに丸め込む  
 把他捏在手心里
- a) \* 手心里 被 捏着 他  
 手の中に 受身介詞 握りこむ 彼を
- b) 把 他 紧紧地 捏在 手心里

処置介詞 彼を ぎっしり 握りこむ 手の中に  
彼をぎっしり手の内に丸め込む

- c) ??捏着 他 的 手心  
握りこむ 彼 の 手の中

11) 口を入れる

大人の話に口を入れる

插嘴大人の谈话

- a) \*嘴 被 插了 大人 的 谈话  
口が 受身介詞 挟む 大人 の 話
- b) 大人の 谈话 他 插不了 嘴  
大人の 話に 彼が 入れられない 口を  
大人の話に、彼が口を入れられない
- c) \*插了 大人 的 谈话 的 嘴  
挟む 大人 の 話 の 口

12) 心を入れる

課題研究に心を入れる

用心于课题研究

- a) \*心 被 用 于 课题研究  
心が 受身介詞 用いる 介詞 課題研究に
- b) 十分 用 心 于 课题研究  
十分に 用いる 心を 介詞 課題研究に  
課題研究に十分に心を入れる
- c) ??用 于 课题研究 的 心  
用いる 介詞 課題研究 の 心

13) 骨を埋める

会社に骨を埋める

为公司倾尽毕生

- a) ?毕生 为 公司 所 倾尽  
一生が 受身介詞 会社に 受身呼応 尽くす
- b) 为 公司 倾尽 其 毕生  
ために 会社 尽くす その 一生

会社のために骨を埋める

- c) ?为 公司 倾尽 的 毕生  
 ために 会社 尽くす の 一生

14) 手付けを打つ

彼はその物件に手付けを打った  
 他为那套房产付了首付

- a) \*首付 为 那套 房产 被 他 付了  
 頭金が ため その 物件に 受身介詞 彼に 払った
- b) 他 为 房产 付了 巨額 首付  
 彼は ため 物件に 払った 巨額の 頭金を  
 彼はその物件に巨額の頭金を払った
- c) 他 为 那套 房产 付的 首付  
 彼は ため その 物件に 払う 頭金  
 彼がその物件のために払った頭金…

15) 膝を打つ

彼はそのことに (一度) 膝を打った  
 他为那件事拍 (了一下) 大腿

- a) \*大腿 为 那件事 被 他 拍了  
 太ももが ため そのことに 受身介詞 彼に 打った
- b) 他 为 那件事 啪地 拍 (了一下) 大腿  
 彼は ため そのことに ぱっと 打 (った一度) 太もも  
 彼はそのことにぱっと膝を打った
- c) \*他 为 那件事 拍的 大腿  
 彼は ため そのことに 打つ 太もも

16) 恩を売る

私が競争相手に (一つの) 恩を売った  
 我卖 (了一个) 人情给竞争对手

- a) ??人情 被 我 卖 给 了 竞争对手  
 人情が 受身介詞 私に 売る 授与介詞 過去テンス詞 競争相手
- b) 我 卖 (了一个) 大 人情 给 竞争对手  
 私は 売 (った一つの) 大きい 人情 授与介詞 競争相手

私は競争相手に大きい恩を売った

- c) ?我 売 給 競争相手 的 人情  
 私は 売る 授与介詞 競争相手に の 人情

以上、前節で述べた熟語を凍結度の点から調べた結果を提示した。ここから分かることは、日本語の熟語表現よりも、中国語の熟語表現の方が、文法操作が適用できる範囲が広く、熟語の凍結度が低いという点である。

#### 4. 身体部位の違い

本節では、前の節で提示した日本語の熟語で使われる身体部位を表わす名詞表現が、対応する中国語では異なった身体部位や身体部位でない表現で表されていること、そして、それらが、どのように異なるのかを体系的に提示する。以下がこれらの違いをまとめた表である。

表4-1

日本語の身体部位	対応する中国語の表現
心	目、恋、全力
念頭、胸、気、肝、身	心
気	意
腰	身
骨	生涯
膝	太もも
恩	人情
顔	名、席
足	わな
頭	頭の筋、脳みそ、思い
口	話
首	解答



#### 4. まとめ

以上、中国語と日本語における対格—動詞、そして与格—動詞からなる熟語の体系的な資料を提示した。この調査から、日中の両言語において、両者の比率はほぼ等しく、対格—動詞からなる熟語のほうが与格—動詞からなる熟語より、圧倒的に多いことがわかった。これは日本語における遠藤（2014）の観察と一致する。しかし、さまざまな文法操作を適用してみると、中国語の二重目的語の構造は日本語の熟語より緩いということがわかった。また、使われる身体部位にも差が見られた。これは文化的な要因にかかわるものである。

#### 注

\* 本稿は、「言語文化研究」の授業におけるレポートを発展させたものである。

井上優先生と遠藤喜雄先生からは多くの助言をいただいた。ここに感謝の意を表す。

- 1) 「挿嘴」は「挿不上嘴（口を入れられない）」、「插了好几次嘴（何度も口を入れた）」のように、また「动心」は「动了真心（真心を動かした）」のように、VとNの間に他の要素を入れることができる。
- 2) 「动心」は受身文に多用される。例えば、「他为花子的美貌所动心（彼は花子的美貌に心が動かされた。）」というような構文が使われる。
- 3) 「将」は「把」と同じく、処置介詞という役割を持つ。

#### 参考文献

- Hoji, Hajime. 1985. *Logical form constraints and configurational structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington, Seattle.
- Fraser, Bruce. 1970. Idioms within a transformational grammar. *Foundations of Language*. Vol 6: 1, 22-42
- Miyagawa, Shigeru and Taeko Tsujioka. 2004. Argument structure and ditransitive verbs in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 13: 1-38.
- 遠藤喜雄. 2014. 『日本語カートグラフィー研究序説』東京：ひつじ書房.